

平成27年度家庭教育応援プロジェクト 大越小親子の学び応援講座

◎期 日：平成27年7月11日（土）13：30～14：45

◎実施PTA：田村市立大越小学校PTA

講師：田澤 雄作 氏 国立病院機構仙台医療センター小児科医

演 題：「過剰な映像メディア漬けによる発達への悪影響」
～子どもの成長に大切なことはなにか～

参加者：児童（4～6年）101名 保護者133名 教職員10名

合計 244名

【講 演】

○これまで関わってきた子どもたちの診療例をもとに、子どもたちの表情の変化などを写真で具体的に提示しながらメディアの与える影響とメディアとの接し方について分かりやすくお話しいただきました。

- ・「楽しい」ということには「感動する」と「興奮する」の2つがある。「感動する」と笑顔があり、「興奮する」には笑顔がない。ゲームをすることは楽しいことだが、「興奮する」楽しさであり、そこには笑顔はない。
- ・小学校で暴れていた子が2週間ゲームをやめると笑顔がもどり、穏やかになった。就学前の子どもたちでもビデオやテレビがついたままの部屋で生活したり、ポケットゲームをやっていたりするだけでも頭痛や腹痛・便秘などの体調不良や表情がなくなるなどする。
- ・ゲームをやらない日を1週間に1日でもつくるのが大切。「早寝・早起き・テレビを消して外遊び」が大切であり、もし、ゲームをするなら1日15分、テレビについては見たい物を選んで1時間を目安にするとよい。
- ・自尊心の確立されるのは、10歳頃である。「生まれてきてよかった」「愛されている」という思いを抱くが、映像メディア漬けによって自尊心が失われると、自己中心主義の傾向になる。特に、男子の学力低下の要因となっている。自尊心の源は、まなざし（笑顔と温かい言葉のシャワー）である。
- ・過剰なメディア漬けが、社会の土台を壊すことにつながる。（見立て遊び・ごっこ遊びができない）ロールモデルが大切となる。子どもは、大人をまねることで、言葉・感性・社会力を獲得する。
- ・子どもの幸せは、「遊ぶ・お話をする・食べる」である。慢性疲労によって、脳の機能障害が起きて笑顔・言葉・感情が失われる。
- ・何時からでも回復は、可能である。（復元力・修復力）

◎講座を実施して

○ 診療例を子どもの表情の変化を中心に実際に写真で提示しながらお話しいただいたことで、子どもたちにとって分かりやすいものであり、心に響くものとなった。多数の親子が参加した講演となり、メディアコントロールについて親子で話し合うよい機会となった。



◎今後、それぞれの家庭で、今回の講演をもとに考えたことを実践していきます。